

かごで水を汲む

本間一恵

国立民族学博物館の「月刊みんぱく」で、2020 年 4 月から始まった「世界のバスケットリー×バスケットリーの世界」の連載が、2022 年 7 月号で終了した。27 回続いたシリーズ最後の記事は「籠で水を汲む」。タイの水汲み籠とつるべ籠が紹介されていた。

どうも似たようなのがコレクションにあったはず、と思いつつ今朝から探しているのだが、まだ見つからない。

「籠で水を汲む」というのは、慣用句として使われるフレーズだ。現在ではあまり聞くことはないと思うが、慣用句辞典には、「籠」だけでなく「箆」や「味噌漉し」というバリエーションと共に載っている。ウィキペディアでも出てくる。意味としてはご想像の通りで、努力しても無駄、効果のないことのたとえ。籠釣瓶(かごつるべ)で水を汲む、という例も出てきた。

ちょっと脇道にそれてしまうが、「籠釣瓶」となると、歌舞伎の有名な外題を思い出してしまう。吉原で花魁八つ橋を切りつけた佐野次郎左衛門の刀が籠釣瓶という妖刀だった。刀剣のよく切れるさまを「水も溜まらず」ということに由来する命名とのことだ。

さて、コレクションの棚をひっくり返して搜索しているが、まだ見つからない。リストを調べるとちゃんと載っているから、思い違いではない。写真もある。ただ「月刊みんぱく」の水汲みかごより小ぶりで形も違う。そうこうしているうちに、「世界の民芸」という本の中によく似たものを見つけた。本といってもホチキス止めのコピーで、昭和 47 年頃の相当古い本だ。乱雑な資料を整理しなくてはとばらばらめくっていたら、偶然出てきた。タイの柄杓として芹澤啓介が解説を書いている。チェンマイの食堂の厨房で使われていたそう。全高 36 センチとあるので、BN コレクションのものよりだいぶ大きい。形は一緒。編目に溜まった漆の感じもよく似ている。この塗りなら水を溜めるに十分な仕上げだ。

水を汲むといえば、BN コレクションにおける代表例は

沖縄のクバ(ビロウ)の葉の釣瓶。井戸の底から水を汲みやすくするために、おもりをつけて使うらしい。

新しい葉で作ったものは鍋としても使えるとか。



26x24x24cm

右のチモールの水汲

みは、実用品のミニサイズなのか、コップとして使うためにこのサイズなのか、それとも、あまりに美しいので、お土産用に洗練されたデザインのものなのか、微妙なところ。



16x16x14cm



これはタイのもの。ミニチュアと思われるサイズだが、ヤシの葉鞘である幅広のシート状の材を折りあげて作っている。形からして水が汲めそう。

13x10x8cm

そしてこれが探している BN 所有のタイの水汲み。

あーー、まだ見つからない!!



21x10x10cm